



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2009/09/02(水)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 56

2009鹿児島全中を観戦して

札幌市立厚別北中学校 高橋 和也

1. はじめに

8月20～22日に鹿児島で行われた全国中学バスケットボール大会(通称:全中)。ジュニアに関わる者なら誰もが憧れ、目標とするその舞台を3年振りに見てきました。所用があり、8月22日には帰札しなければなりませんので、大会1日目の予選リーグと大会2日目の決勝トーナメント1・2回戦(ベスト4が出揃うまでの試合)の観戦でしたが「やっぱり見に行っても良かった。」と思える収穫がいくつもありましたので、その一部をTACTICSをお借りして皆さんにお伝えします。

2. 鹿児島方式!?

例年であれば、大会1日目は4会場8コート、2日目は2会場4コートで運営され、どの会場も男子と女子のカードが半々で組まれます。しかし、今年度は「男女七歳にして席を同じうせず」という鹿児島のお国柄(?)か、1・2日目はサブアリーナを含めて4面取れる大きな2会場(男子:鹿児島アリーナ、女子:サンアリーナせんだい)に男女がスパッと分かれるという大会運営でした。しかも残念ながら、鹿児島市と薩摩川内市の距離はそれほど近くなく、両会場を移動して見て歩くのはあまりにタイムロスが大きい…。そこで、1日目は女子会場、2日目は男子会場と観戦場所を定め、本道勢の試合を中心に観戦することにしました。

この大会運営が今年度限定の鹿児島方式なのか、それとも次年度開催される広島でも踏襲されるのかはわかりません。ただ、もし踏襲されたとして「男子の試合だけ」「女子の試合だけ」を観たい人はともかく、「男女両方とも」観たい人にはちょっと苦しい…。もっと言えば、男女で全国出場を狙う指導者にとっては、どちらかのベンチにしか入れない大会運営と言えます。全国の舞台は男女両方を指導して両方を全国に行かせられるものではない…という大前提が根底にあるような気さえします。

3. 戦う以前のことで…

全中は夏の大会ですから、以前は「暑さ対策」と称して、北海道勢もあれやこれやと対策を練った時期もありました。しかし、最近は空調設備の整った良い会場で行われることがほとんどです。今回の2会場も快適で、下手をすると冷房の効きすぎで寒いぐらいでした。はっきり言って、夏の美香保体育館の方が暑いです。

そう考えると「雪国のハンデ」などというものはありません。むしろ、真冬でも暖房のガンガン効いた暖かい体育館で思い切り練習ができる本道勢より、冬になると寒い体育館で練習効率が下がる道外勢の方がハンデがあると考えて良いでしょう。

ただ、一步体育館を出ると、サウナのようなうだる暑さ。夜になっても一向に涼しく

ならない状況は北海道では「未知の領域」です。この部分を指導者が掌握して、快適な移動手段と宿舎を確保することが必要でしょう。「安かろう悪かろう」では、しのぎを削る全中では十分なパフォーマンスを発揮できないのは言うまでもありません。

また、意外な盲点は「水」です。今年の鹿児島は焼酎の名産地でもあり、水は大変美味しかったですが、これが大都市での開催となると、北海道の人間にはとても飲めない水に出会うことになります。試合中の給水も含めて「水」をいかに確保するか。強豪校の指導者になればなるほど、このような部分にまで気を配っていることがよくわかります。試合はやはり戦う以前から始まっているのです。

4. 総論『全中で勝つチームの戦いぶり～男女共通項』

ライブで観ると、全中で勝つチームの戦いぶりには、まず第一に「激しさ」と「厳しさ」が目につきます。自分たちのプレイスタイルに妥協を許さない姿勢。ベンチ入り全ての選手・スタッフから醸し出される勝利への一体感。それらがファウル寸前の所でガチガチとやり合うプレイに表れ、強引にシュートをねじ込んだり、相手からボールを奪い取る攻防となります。これができなければ『いい試合』はできても『勝つこと』はできません。

そして、相手に試合の主導権を握られても、我慢して我慢して追いかける「粘り強さ」。それでいて、『ここだ!』という場面で確実に決めてくる「勝負強さ」。さらに、相手が隙を見せると一気に畳みかけてくる爆発的な「集中力」。全中を勝ち抜くチームのプレイにはこれらの要素が必ずあります。

全国で有名な指導者の方々のベンチワークを見てみると、私はこれらの『選手に必要な要素』を、他ならない指導者自身が持ち、指導を通じて体現していると思えました。日々の練習では、それらをより徹底しているのは言うまでもないでしょう。そんな指導者の姿に感銘し、共鳴し、やがて選手自身がコートの中で『体現者』となるのが、全中で勝つチーム。私はそう思います。

5. 各論『北海道女子と全国の差』

札幌清田は北海道1位として全中に出場したので、シード権を獲得し、他ブロックの1位と競合しない予選リーグに入りました。恵まれた組合せを生かし、何とかして予選リーグ突破につなげてほしいところでしたが、残念ながら予選敗退に終わりました。その戦いぶりには随所に清田らしさが見受けられましたが、オールコート・プレスへの対応に象徴されるように、相手の激しいディフェンスに対応しきれなかった場面が多々あったことが敗因の1つ。次いで、勝負所で相手の中心選手のシュートを止められなかったことも悔やまれました。

一方、北星女子は東北1位の鶴岡第二、関東2位の埼玉栄と競合する予選リーグに入りました。厚別北ではゴールデンウィークに毎年東北遠征を行っています。その際、ウチの女子が秋田県でベスト4レベルの相手に全く歯が立ちませんでしたので、そんな激戦を勝ち抜いた東北1位は相当強いことが予想されました。また、関東2位の埼玉栄は2年前に全中準優勝を遂げた強豪校です。北星の走りがこの2チームにどこまで対抗できるか、注目でしたが、結果は清田と同様に予選敗退。北海道選抜でも中心となって活躍した上村選手のプレイは光りましたが、道内では圧倒的な当たりと走りで相手を打ち負かす北星に、さらに上回る攻防を相手チームが繰り返す試合展開には衝撃を受けました。

全中の女子の試合を見ていて全般的に感じることは「女子だから…」という印象をほとんど受けないということです。北星女子と対戦した埼玉栄のスタメンは全員ワンハンドでジャンプシュートを打っていました。それに代表されるように、下手な男子チームなら完敗するであろうスピードとパワー。前述したように妥協を許さない指導者の姿勢が、選手のプレイに表れていました。

また、各指導者の「バスケット観・哲学」に基づいた戦略・戦術がコート上で繰り返されておられ、大変勉強になりました。ただ、私はそれ以上に、強豪校と呼ばれるチームは、

選手一人一人の基礎・基本がしっかりとしていることに感心しました。基本があって応用。また、それが技術だけでなく、身体の使い方や会場内での立ち振る舞いでも模範となる高いレベルの選手達であることに『さすが…』と嘆息しました。

清田・北星女子も奮闘していましたが、残念ながら、北海道女子と全国の差はまだあることを実感します。現在、ジュニア連盟でも『女子強化』をテーマの1つに掲げています。道内の指導者で知恵を出し合い、長期的な視野に立ちながらも、切磋琢磨していくことが急務と再確認しました。

6. 各論『北海道男子と全国との差』

男子は帯広緑園がベスト8。札幌北陽は得失点差で残念ながら予選リーグ敗退をしたものの、東北1位の藤崎中と大接戦の末、勝利する活躍を見せました。全国との差はなくなっていると考えられます。

私は大会2日目の決勝トーナメントより、試合観戦しましたが、帯広緑園はベスト4以上の成績を残す可能性を大いに感じました。ジュニアオールスターでJOC最優秀選手賞に輝いた仁平選手をインサイドに擁し、スピードとシュート力のあるアウトサイドのプレイヤーは全中の舞台でも全く見劣りしません。決勝トーナメント1回戦の対戦相手である並榎(関東4位)には再三食い下がられながらも、落ち着いた試合運びで快勝しました。

そして、準決勝進出をかけて布水中(石川県・北信越1位)との対戦。布水中は全中に何度も出場している伝統校だけに、ガード2人はよく鍛えられており、試合の駆け引きを十分に理解していました。これに180cm近いシューター1人と、地味だがリバウンドによく飛びつく180cm前後のインサイドの選手が2人絡むラインナップでした。

一進一退が続きましたが、勝敗を決するポイントとなったのは、ゾーンとプレスの攻防だったと言えます。布水は後半までゾーンとプレスを温存。勝負所でサッと引き出してきたのはさすがです。緑園が何本かタイミングのずれたシュートを打つ間に、点差を引き離しました。緑園としては、オフェンスのリズムが崩れた時間帯にディフェンスから建て直したいところでしたが、相手インサイドのプレイヤーにオフェンス・リバウンドを頑張られ、さらに、試合の駆け引きができるガードのうち、1人はよく押さえていましたが、もう1人のガードに痛いところで3ポイントを決められたのが残念でした。それでも最後まであきらめずに全力を尽くし、残り2分で10点差を、前から当たって一気に4点差まで詰めより、会場を大いに沸かせました。北海道1位にふさわしい戦いでした。

優勝したのは今年の北海道カップにも出場した京北中です。準々決勝で対戦した姪浜との激戦を制し、決勝では100点ゲームと圧倒的な勝利を収めました。京北の魅力は何と言ってもスタメン全員がよく走り、よく跳び、ノーマークならどこからでも決めてくるシュート力にあります。地元・九州大会で優勝を狙った姪浜は、アメリカナイズされた能力の高い選手を中心に1on1主体で戦いましたが、京北のシンプルだが、止めることのできない怒濤のオフェンス力に飲みこまれた感があります。

スコアを見てわかる通り(京北70-60姪浜)、ジュニアの試合で1試合70点を取る破壊力があればまず負けることはないでしょう。全中で北海道勢が優勝するために必要なこと。1つは相手のディフェンスがどうであろうとも、ハイスコアを叩き出せるオフェンス力。そして、自分たちの良さを上手く引き出す試合運び。最後に相手のエースをしっかり押さえる守り。この3点にあると私は考えます。差がなくなっているとは言っても、未だに優勝チームが北海道から出ていないのが現状。単独チームで上述した3点をクリアすることはなかなか難しいですが、妥協を許さず、頑張り抜く信念が指導者に求められます。女子と同様、着眼大局・着手小局の姿勢で切磋琢磨していきたいものです。

7. 最後に

他都府県はそれぞれの地域で優勝しても、ブロック大会(東北・関東・北信越・東海・近畿・中国・四国・九州)に出場し、さらにそこで勝ち抜かないと全中出場はできません。熾

烈を極めるこれらの戦いの中で、試合に勝利する大切な要素を自然と身に付けている可能性は大いにあります。もちろん、県外チームと練習試合をするのは当たり前。こういった道外チームの環境に比べると、北海道が勝てないのは「北海道」という単一ブロックで、しかも道外チームとの交流が少ないから…と過去にはよく言われました。

しかし、今では道外遠征をするチームも数多く出ており、『北海道カップ』という全国の強豪校を招いての大会も実施されるようになりました。もう、北海道であることが絶対的なハンデの時代ではありません。

「北海道カップに是非参加したい！」と全国のチームから言われるように。そして、他のブロック大会に負けられないような北海道大会に。道内全体のレベルアップを図るために、一指導者としても、ジュニア連盟に関わる者としてもこれからも頑張っていきたいと考えます。来年はジュニア連盟創立10周年。皆さん、ともに頑張りましょう！

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会